

石見活性化キャンペーン企画

明日へつなぐ

<30>

ロシア第2の都市、人口457万人のサンクトペテルブルク市内の植物園内に5月中旬、一棟の日本家屋の骨組みが姿を現した。2年後に創立300年を迎える歴史ある植物園の、30周年記念事業で建設が進む日本庭園の茶室。その屋根材の和瓦に、石見地方特産の石州瓦が採用された。茶室は今秋にも完成予定で、日本庭園が造成される一角は年間15万人を超える来園者のほとんどが通る場所に位置する。

施工のため、日本を代表する瓦工の職人らと現地を訪れた石州瓦工業組合(江津市嘉久志町)で地域資源販路開拓推進員を務める

石見部の経済団体などが浜田港から船便を使い、石州瓦を初めて出展した見本市で、関係者が在サンクトペテルブルク日本総領事から日本庭園の建設計画を手入。

石州瓦製販の丸惣(江津

世界へ

第6部 石州瓦 ①



ロシア・サンクトペテルブルク市内の茶室の屋根に施工される石州瓦。石州瓦は海を渡り、ロシア市場で本格的に動きだそうとしている

ロシア市場の開拓に始動

市(二宮町)と輸出を手掛けるエル・アイ・ビー(浜田市熱田町)でプロジェクトを立ち上げ、施工準備を進めてきた。

石州瓦のロシア輸出は、極東のウラジオストク向け

市内ではこれまでに約15棟が施工されている。こうした実績を裏付けるのが、凍害や塩害に強い石州瓦の特長だ。島根県産業技術センターが実施したマイナス50度の凍害試験でも耐久性が証明されている。

極寒のロシアは日本の他産地の瓦がなかなか入り込めない未開の市場であると同時に、台湾やフィリピンなど海外への輸出実績を持つ

大田、江津、浜田3市の8事業所で構成する石州瓦工業組合の理事長を務める丸惣の佐々木賢一社長(65)は「大手住宅メーカーも海外市場の開拓に本腰を入れ

ラジオストクからモスクワまでの試験輸送で届けられた。

ロシア国内を東西に横断する全長約9千kmの鉄道ルートを使えば、海上輸送よりも輸送日数を大幅に短縮できることが確認され、巨大市場の西ロシアは一気に近づいた。

石見伝統の石州瓦は海を渡り、ロシア市場で本格的に動きだそうとしている。

つ石州瓦にとって、強みを生かせる市場だ。

石州瓦業界が海外に目を向ける背景には、住宅着工戸数の減少で瓦市場が縮小する国内の厳しい事情がある。年間出荷枚数はピーク時の3分の1以下に激減。倒産などによる業界再編も進み、産地としての危機感

新規販路開拓の鍵を握るロシア市場。茶室の屋根に使われた瓦の一部は、今年1月末に浜田港を出港し、シベリア鉄道を利用したウ

台湾向けからスタート。その後、フィリピン、ロシアへと拡大した。10年のロシア向け輸出実績は約5万8千枚。ロシアのほか、寒冷地の中国東北部も今後の有望市場とされる。

日本三大産地の一つとして、かつては年間2億枚を出荷した石見地方。伝統産業を取り巻く環境が変化する中、受け継がれてきた技術や赤瓦の景観を守り、未来につなげようとする新たな動きがある。石州瓦にかかわる人たちの思いに迫り、誇るべき地域資源を見つめ直す。

(毎週月曜日掲載)

クリック